

研究論文

# 比べ読みによる小学校国語科教材の教材研究の試み —「とびこめ」(4年)と「大きなしらかば」(5年)を中心に—

堀江 祐 爾

## 1 本論の背景と目的

### 1- (1) 背景と目的—学習指導要領が求める多読の学習指導—

本論においては、国語科教材研究の基礎としての「比べ読み」の役割と方法について考察する。

論者は「比べ読み」に関する次のような論考を発表している。<sup>1)</sup>

○国語科教材研究の基礎としての比べ読み—「おおきなかぶ」(1年)と「スイミー」(2年)を中心に—

○比べ読みによる小学校国語科教材の教材研究の試み—「海の命」と「一人の海」の比べ読みにより〈空所〉を埋める (I) —

○比べ読みによる小学校国語科教材の教材研究の試み—「海の命」と「一人の海」の比べ読みにより〈空所〉を埋める (II) —

まず、「比べ読み」の考察をおこなう背景として、学習指導要領が求める多読の学習指導について整理したい。上に示した最初の論考において、平成20年版と平成29年版学習指導要領を取り上げて、それまでの国語科教育が置き去りにしてきてしまっていた「系統的な読書指導」、「多読の指導」の重要性が明示されたことについて詳述した。

ここでは、本論執筆時の「現行学習指導要領」である平成29年版小学校学習指導要領・国語に焦点を当てる。[第1学年及び第2学年]の「C 読むこと」領域の言語活動は、次のとおりである(本論における下線は論者によるものである。以下同様)。

ア 事物の仕組みを説明した文章などを読み、分かったことや考えたことを述べる活動。

イ 読み聞かせを聞いたり物語などを読んだりして、内容や感想などを伝え合ったり、演じたりする活動。

ウ 学校図書館などを利用し、図鑑や科学的なことについて書いた本などを読み、分かったことなどを説明する活動。

アの「事物の仕組みを説明した文章などを読み」は、ある特定のテーマに関係する複数の本を読むことを求めている。イの「読み聞かせを聞いたり物語などを読んだりして」に示された「読み聞かせ」は、さまざまな本に出会う場である。さらに、「物語などを読んだり」も多読の学習指導を求めている。ウの「学校図書館などを利用し、図鑑や科学的なことについて書いた本などを読み」は、学校図書館

においてより多くの本と出会わせることを求めた言語活動である。

こうした学習指導要領が求める多読の学習指導を実現するためには、教師自身がしっかりと複数の作品と作品を結びつける教材研究の能力を高めておく必要がある。そこで本論においては、「比べ読みによる小学校国語科教材の教材研究の試み」というテーマのもと、国語科教材研究の基礎としての「比べ読み」の役割と方法について、「とびこめ」と「大きなしらかば」という教材を中心に考察をおこなっていく。

### 1 - (2) 「比べ読み」に関する先行研究

先に示した論者による「比べ読み」に関する三つの論考において、先行研究について整理をおこなっている。本論においては、ここ最近の「比べ読み」に言及した論について押さえることにする。

坂東・貞安（2022）においては、本論と同様に学習指導要領の示す方向について、次のように述べている。

新学習指導要領の告示以降特に、複数の教材（資料）の内容を比較検討して、それぞれの資料に含まれている情報を統合したり構造化したりして、それらを基に自分の考えを形成することが全教科的に求められている。

そして、「比べ読み」の有効性について、次のように論じている。

「比べ読み」の有効性の一つとして、複数教材を観点を定めて読むことで、学習者が自分の読みの過程や評価を捉え直すことができ、それが次段階の自分の考えを形成する際の基礎的作業となることが見出せる。

本論は、あくまで「比べ読みによる教材研究の試み」であるため、上の引用の「学習者」を「指導者（教師）」と読み替えることになる。本論においては主に教材研究における「比べ読み」を扱うが、教材研究は授業のためにおこなうものであり、その意味において、「（学習者が）自分の考えを形成する際の基礎的作業」を内包していると言うことができよう。

大西（2023）は、「『比べ読み』による学習活動を通して、テキストとテキストの対話、人とテキストの対話、人と人との対話が導かれていく。」と述べ、「比べ読み」の要件として次の三つを提示している。

- ① 作品の特質を明らかにする
- ② 読みの問題を設定し、問題解決を図る
- ③ 他者との交流を通して、新たに発見したことを表現する

本論において示した「比べ読み」の大学院での講義がこの三つの要件を満足することを、後に【5

-(1)- 2「比べ読み」の要件の満足】において確認する。

## 2 教材研究の方法・手段としての「比べ読み」と本論において取り上げる教材のあらすじ

### 2- (1) 教材研究の方法としての「比べ読み」ー共通点と相違点に着目するー

ある作品の特色や主題をとらえるには、その作品を何度も読み込めばいい。実際には、何度も読む時間がない場合もある。さらに、その作品を何度も読むことによって見つけたことがら、本当にその作品の特色や主題であるかどうか自信が持てないこともあろう。ある作品の特色や主題を見通すための方法・手段として、「比べ読み」をおこないたい。

Aという作品だけを読むのではなく、Aに何かの形で関係のあるBという作品を並べて比較し、その相乗効果によって、Aの特色を浮かび上がらせるのである。どのような関係に着目してBを選ぶかが問題であるが、大きく言えば、共通点と相違点であろう。

### 2- (2) 本論において取り上げる教材ー「とびこめ」と「大きなしらかば」のあらすじー

本論においては、教材研究の基礎として、「とびこめ」(平成元年版光村図書小学校国語教科書4年下巻)と「大きなしらかば」(昭和57年版東京書籍小学校国語教科書5年上巻)の比べ読みをおこなう。それぞれの教材のあらすじを示す。

#### ■「とびこめ」(レフ＝トルストイ、西郷竹彦訳)のあらすじ

一そうの帆船が世界を航海して帰路についていた。船の上では一びきのさるが、船員たちの周りでふざけ回って、人々を楽しませていた。さるは突然、12才になる船長の息子の帽子をひったくり、それをかぶってマストの上によじ登ってしまう。少年はどうすればよいか分からない。さるは、一番上のマストの横げたにこしをかけて帽子を歯やつめで引きさき始める。少年は、さるをおどしたり、どなりつけたりするが、さるはますますむきになる。船員たちは、どっとわらいこける。

少年は真っ赤になって、さるを追いかけてマストに登りはじめた。少年は「ようし、にがしはしないぞ。」とさげび、さらにはい登る。さるは少年においでおいでをして、またもやさらに高いところへと登っていく。少年もむきになって登っていく。こうして、さると少年は、一緒に一番高いところまで登りつめてしまう。さるは一番上の横げたの先に帽子をひっかける。少年はものすごくむきになっていたため、マストから手を放して、横げたの上をわたり始める。それを見た船員たちはおそろしさにはっと息をのむ。足でもふみ外そうものなら、甲板にたたきつけられて粉みじんになってしまう。

その時、少年の父親である船長が船室から甲板に上がってくる。船長は、かもめをうつために鉄ぼうを持っていた。船長はマストの上の息子を見ると、いきなり息子に鉄ぼうを向けてさげぶ。「海へ、海へすぐとびこむんだ。うつぞ。」少年はなんのことかわからない。そこで、船長はさらに続けて、「とびこめ。でないとうつぞ。一、二。」とさげんだ。父親が「三。」とさげぶのといっしょに、少年はまっさかさまに海にとびこむ。

20人のわかい水夫たちが、船から海へとびこむ。やがて、少年は浮かび上がり、船に引き上げられ息を吹き返す。

船長はこれを見ると、突然大きな声でうめきだす。そして、ないているところを人に見られないように、自分の船室へかけこんだ。

■「大きなしらかば」(ニーナ＝アルチャーホワレオ、西郷竹彦訳)のあらすじ

男の子アリオージャは、友人ボロージャに「おまえ、あの大きなしらかばには登れないだろうな。まだ小さいからな!」とばかにされる。アリオージャは「でも、許してくれないのさ。ママがね、登るより下りるほうがずっとむずかしいって言うのだもの」と言う。ボロージャは、大きなしらかばに登っていき、幹の分かれ目にこしかけて、「ぼくの所まで登って来い、あまえっ子!」「こわいんだなー。」とアリオージャをからかう。アリオージャが遠くへひっこむと、ボロージャはもっと上の方まで登っていく決心もつかなかったため、木から下りて家に帰る。

庭に一人残ったアリオージャは、やがて木に近寄り登り始める。「ぼくはボロージャよりも、もっと高く登ってやるぞ!」と。さっきボロージャが登ったところまでたどり着く。そして、てっぺんまで登ってみなければならないとさらに登っていく。しらかばの木のてっぺんにたどり着き、「おおい!」とさけぶ。

ボロージャがアリオージャのお母さん(ジーナ)のところに現れて、「おばさんとこのアリオージャが、大きなしらかばの木に登ったんだ! 落ちるかもしれないよ。」と知らせる。お母さんはボロージャに案内させて木に近づき、息子の状況を知る。お母さんはさわぎたてるボロージャに家に帰るように言う。そして、お母さんは「どう、アリオージャ、上の方は気持ちがいいでしょう。」とアリオージャに声をかける。アリオージャはお母さんがおこるどころか、とてもおだやかなやさしい声をかけたのにびっくりする。「少し休んで、それから下りるのよ。でも、急いじゃだめ、ゆっくりね……。」「そう、じゃ、下りておいで、勇かんにね!」とお母さんはアリオージャをやさしく導く。

その時、通りがかったべっそうの人が、「なんて所へ登ったんだ。いたずらぼうず! さっさと下りて来い! 落ちるぞ!」とさけぶ。アリオージャは思わず足を踏み外しそうになるが、お母さんは「そうじゃないの、アリオージャ。」「その次のえだにのるのよ。」と指示をする。そして、べっそうの人に「どうぞ、ご心配なさらなくてください。あの子は木登りがとても上手なんですの。あの子は勇かんな子なんです!」と言う。

アリオージャは、下には落ち着いた、自信にあふれたお母さんがおり、いろいろ注意をあたえ、やさしい、はげましのことばをかけてくれるので、少しずつ下りていき、とうとう下りることができた。

見知らぬべっそうの人が、「いいぞ、らっかさん兵になれるぞ!」と言う。

お母さんは、アリオージャを抱きしめ、「アリオージャ、約束してちょうだい。もう、決して、こんなにママを苦しめないって。」と言い、そして、いきなり大きな声をあげてなきだし、ふり返っても見ずに、急いで帰って行った。お母さんは野菜畑を通過して、谷の方へ行った。草の上にしを下ろすと、ネックチーフで顔をおおった。

アリオージャは、お母さんとならんで、谷のしゃ面にすわると、お母さんの手を取り、かみをなでながら言った。「ねえ、ママ……。ね、なかないで! ぼく、もう大きくなるまで、あんな高い所には登

らないよ……。ねえ、もうなかないで!」。

アリョーシャは、お母さんがなくのを、初めて見たのだった。

## 2 - (3) 「とびこめ」と「大きなしらかば」を選んだ理由ー共通点と相違点ー

「とびこめ」と「大きなしらかば」を「比べ読み」の対象として選んだのは、次のような両作品の共通点と相違点に着目したためである。また、教科書教材として、同時期に掲載されていたということも理由のひとつである。

〈共通点〉

- a 親子が出てきて、それぞれの親の機転・知恵がストーリーのキーとなっている
- b どちらも「高いところに登る」ということが物語の事件となっている
- c どちらも子どもをからかう存在がいる
- d どちらも最終場面において親が泣く
- e どちらもロシアの作者による物語である
- f どちらも翻訳者が西郷竹彦である

〈相違点〉

二つの作品の相違点としては次のようなものを挙げることができる

### A 父親と母親の違いー〈父性〉と〈母性〉ー

「とびこめ」において機転を利かせるのは父親である。「とびこめ」では、瞬間的な判断と厳しい手段、そして突き放すような声かけという〈父性〉的なものが描かれる。一方、「大きなしらかば」では、知恵を働かせるのは母親である。時間をかけたゆったりとした手段、そして包み込むような声かけという〈母性〉的なものが描かれる。<sup>2)</sup>

### B 登場人物の名称の示し方の違い

「とびこめ」においては、登場人物は「少年」「少年の父親」「船員たち」のように、立場や関係性を示すだけであり、具体的な名前は示されない。

一方、「大きなしらかば」では、アリョーシャ（少年）、ボロージャ（友人）、そしてジーナ（母親）という固有名称が示される。ただし、「べっそうの人」については、「見知らぬ人」であるゆえ固有の名前は示されない。そして、地の文においては、母親は「お母さん」と表現される。

### C 高い所に登り、下りるまでの過程の違いー〈急〉と〈緩〉ー

「とびこめ」においては、「とつ然、さるは、船長のむすこで、12才になる少年にとびかかり、少年の頭からぼうしを引たくると、それをかぶって、するするとマストへよじ登ってしまいました。」と「突然」のできごとが起点となる。そして、「まるで、ばかにするみたいに、少年をからかったり、顔をしかめてみせたりしました。」さらに、「少年は、真っ赤になって、ジャケットをぬぎすてると、さるの後を追いかけて、マストにとびつきました。あっという間に、ロープを伝ってはい登りました。」と、甲板からマストに登るまでが〈急な〉展開となっている。一方、「大きなしらかば」でも、友人ボロージャから「おまえ、あの大きなしらかばには登れないだろうな。まだ小さいからな!」と「ばかにされる」のは同じである。それに対して、登り方は対照的である。ボロージャがいなくなった後、「アリョーシャ

は、こぶの一つ一つ、えだ折れのあとの一つ一つにつかまりながら、登り始めた。」とゆっくりと登り始める。さらに、「そして、もっと高く、もっと高くと、だんだん登っていった。」と少しずつ登っていく。このように〈緩やか〉に登る過程が描かれる。下りるときも〈急〉-〈緩〉と対照的である。

D 〈第三者〉の有無-「船員たち」と「見知らぬべっそうの人」-

「とびこめ」では、「船員たち」は、最初は「船員たちは、どっとわらいこける。」と〈傍観者〉的立場だったが、やがて、「船員たちはおそろしさにはっと息をのむ。」と当事者意識が高まり、さらに、「20人のわかい水夫たちが、船から海へとびこむ。」と〈参加者〉になる。

「大きなしらかば」では、「見知らぬべっそうの人」である〈第三者〉が途中で登場し、「なんて所へ登ったんだ。いたずらぼうず! さっさと下りて来い! 落ちるぞ!」といらぬことを言う。アリョーシャが足を踏み外しそうになるが、お母さんは「どうぞ、ご心配なさらなくてください。あの子は木登りがとても上手なんです。あの子は勇かんな子なんです!」と言い返す。

E 最終場面において親が泣くところの違い-「見せない」と「見せる」-

最終場面において親が泣くところは共通しているが、その際の態度に違いが見られる。「とびこめ」では、「ないているところを人に見られないように、自分の船室へかけこんだのでした。」と、泣いているところを「見せない」設定になっている。「人前で泣くものではない」という〈父性〉に関係する設定の一つと捉えることができよう。

「大きなしらかば」においても、いったんは次のように母親は木のそばから離れる。

そして、お母さんは、いきなり大きな声をあげてなきだし、ふりかえっても見ずに、急いで帰って行った。

テラスには、ポロージャが立っていた。お母さんはそのそばを走り過ぎると、野菜畑を通過して、谷の方へ行った。草の上にしを下ろすと、ネッカチーフで顔をおおった。

そして、アリョーシャは、次のように母親に寄り添う。

アリョーシャは、お母さんとならんで、谷のしゃ面にすわると、お母さんの手を取り、かみをなでながら言った。

「ねえ、ママ……。ね、なかなかで! ぼく、もう大きくなるまで、あんな高い所には登らないよ……。ねえ、もうなかなかで!」

アリョーシャは、お母さんがなくのを、初めて見たのだった。

このように、最終的には泣いているところを息子に「見せる」設定となっている。「お母さんがなくのを、初めて見たのだった。」と説明されており、ふだんは泣くことのない気丈な母親であることがわかる。

「とびこめ」においては、泣いているところを「見せない」展開によって、「突き放すような関係」

としての〈父性〉的なものが描かれる。それに対して、「大きなしらかば」では、いったんは木から離れるが、やがて息子に泣くところを見られることになる。「アリョーシャは、お母さんとならんで、谷のしゃ面にすわると、お母さんの手を取り、かみをなでながら言った。」のように、今度は息子が母親を包み込むような行動を見せる。ここには息子を「引き寄せるような関係」としての〈母性〉的なものが描かれていると捉えることができよう。

## 2 - (4) 「とびこめ」と「大きなしらかば」の基本的な主題

「とびこめ」と「大きなしらかば」の主題を簡略に示すと次のようになるであろう。

〈子どもに対する親の深い愛情〉

「とびこめ」と「大きなしらかば」を扱う際、教師は主題、つまり学習者に読みとらせたいことをこのようにまとめるのではないだろうか。学習者に示すにはこのようなまとめ方で十分ともいえよう。一方、教師はもっと幅広くこの作品の主題や特徴をとらえておく必要がある。この作品の持つさらに深い主題に迫る意見を述べる学習者がいないとは限らない。教師が幅広いとらえ方をしていないと、そうした意見を生かせないのではないだろうか。

## 3 大学院での講義における実践例

### 3 - (1) 講義における課題

大学院での講義において、表1のような課題を受講生たちに示し、作品の特徴をまとめさせた。<sup>3)</sup>

【表1】 受講生たちに示した課題

#### 「とびこめ」と「大きなしらかば」とを比べ読む

「とびこめ」(4年教材)と「大きなしらかば」(5年教材)とを比べ読んだ時、それぞれの教材の特性がより鮮明に浮かび上がってきます。

「共通点」と「相違点」に留意しながら、浮かび上がってくることがらをまとめて下さい。

受講生たちが生み出した考察の中から、先に【2-(3)「とびこめ」と「大きなしらかば」を選んだ理由-共通点と相違点-】に示したような共通点と相違点に着目した代表的なものを示し、論者の評価を添える。

① Y・T (氏名をアルファベットによって略して示した。以下同様)

〈共通点〉

- ・主人公が子どもであること。子どもだからこそ、あんなに無鉄砲に高いところに登った。(子どもは高い所が好きだということもあるだろう)
- ・訳者が同じ西郷さんであること。

〈相違点〉

「とびこめ」の方は、高い所に登ったあと、少年の心情が描かれなため、読み手はかんぱんの側から少年を見つめる人(特に父)に同化しやすい。

「大きなしらかば」は、登ったあとのアリョーシャと、下にいる母、両方の描写があるので、読み

手は二人の視点を行き来して読むことができる。どちらも緊張感を演出するために、効果的に使われていると感じたが、「とびこめ」は少年よりも父の心情に沿うことを、「大きなしらかば」では、母と少年どちらも的心情を対比させることでより作品を味わうことができるのではないだろうか。

[1]への評価] この受講生は「高い所が好き」という子どもの特性に注目している（〈共通点〉の〔b どちらも「高いところに登る」ということが物語の事件となっている〕）。また、両作品が西郷竹彦訳という共通点に気がついている（〈共通点〉の〔f どちらも翻訳者が西郷竹彦である〕）。さらに、「同化」「視点」という用語を使って相違点について記述している。<sup>4)</sup>

② T・H

〈共通点〉

- 子どもにありがちな、見通しのもてない行動を衝動的にしてしまうという話の起こり。
- 我が子を思う親の気持ちの描かれ方。
- 日常の一場面が舞台となっていること。

〈相違点〉

- 「とびこめ」は情景描写中心で、少年の心情があまり描かれていないのに対し、「大きなしらかば」は特に前半、木に登るまでの少年の気持ちがセリフなどもまじえ、詳しく描かれている。
- 母性と父性（子どもに対する思いは同じだが、対応や対処法が違う）の描かれ方。
- 事件後の少年の描かれ方（「とびこめ」は少年のその後の心情にふれていないのに対し、「大きなしらかば」はその後の少年が少し描かれている）。

[2]への評価] 子どもの行動を「衝動的」と捉えている（〈共通点〉の〔b どちらも「高いところに登る」ということが物語の事件となっている〕）。「描写」についての違いについて記述している。「母性と父性」という二項対立を使っている（〈相違点〉の〔A 父親と母親の違い－〈父性〉と〈母性〉－〕）。「事件後の少年の描かれ方」の違いに注目している（〈相違点〉の〔E 最終場面において親が泣くところの違い－「見せない」と「見せる」－〕）。

③ A・M

〈共通点〉

- 少年が意地になって、とても高い所に登る。  無謀な行為とその結果
- 我にかえった少年が下りるのに困る。
- 父、母の機転によって助かる。  両親の愛情
- 泣き出す父、母、自己の行為を後悔。
- からかい、笑いなどによって、少年は頭に血がのぼってしまう。

〈相違点〉

「とびこめ」

- 父親の船長は助ける手段は鉄砲とおどし。

（父親の愛情と厳しさ、優しさ）父性

「大きなしらかば」

○母親の助ける手段は、落ち着かせ、アドバイス。

(母親の優しさ、合理性) 母性

[3]への評価]「無謀な行為とその結果」「両親の愛」という上位概念によって、作品の構造を捉えている(〈共通点〉の[a 親子が出てきて、それぞれ親の機転・知恵がストーリーのキーとなっている])。〈父性〉を「父親の愛情と厳しさ、優しさ」、〈母性〉を「母親の優しさ、合理性」と対比している(〈相違点〉の[A 父親と母親の違い－〈父性〉と〈母性〉－])。

#### 4 S・F

〈共通点〉

少年……未熟な少年が、挑発に乗って、無理な危険を冒す。親の導きにより、最悪の事態を回避するが、回避するまでは、事態の本質を十分には把握しない。

親……我が子の危険を知り、周囲の予想しない最善の方法で、危機を乗り越えさせる。子の安全を知り、それまでの自信にあふれるかに見える態度を一変させ、涙する。

挑発者……少年を危険へいざなう挑発をする。その後は物語における重要性を失い、焦点からはずれる。

傍観者……少年の危機を極めて常識的な(読者と同じ)目で見、親とは異なる。しかし「当たり前」の反応を示し、それが少年の危機を増す。

〈相違点〉

①「大きなしらかば」の母と「とびこめ」の父の具体的対応の違い。母のやさしさ、父のきびしさ、という母性父性の違いということ。

②「大きなしらかば」では、少年が事態の意味を理解するまでが描かれている。

[4]への評価]「挑発者」と「傍観者」という上位概念によって、登場人物の立場・役割を整理しようとしている(〈相違点〉の[D〈第三者〉の有無－「船員たち」と「見知らぬべっそうの人」－])。

#### 5 A・T

〈共通点〉

○「子ども」が不注意により危機におちいる。

○それを助けるのは「大人」である。

〈相違点〉

助け方にちがいがあある。

「とびこめ」

絶対的な暴力により、目先の危機から目をそらす。ただ、絶対的暴力は、そこからのぬけ道とともに与えられるべき。

「大きなしらかば」

子どもに対する信頼。そのことは子どもに「大人も認めている」という自信を与える。命の危機の場合は仕方ないが、いつもこうだと子どもは自立できないだろう。

[5]への評価]「絶対的暴力は、そこからのぬけ道とともに与えられるべき」や「命の危機の場合は

【表2】共通する主題

【とびこめ】
子どもに対する 親の 深い愛情
【大きなしらかば】
子どもに対する 親の 深い愛情

【表3】主題についての吟味・  
考察の成果

【とびこめ】
子どもに対する <u>父親の</u> <u>突き放すような</u> <u>厳しい</u> <u>瞬間的な</u> 深い愛情
【大きなしらかば】
子どもに対する <u>母親の</u> <u>包み込むような</u> <u>やさしい</u> <u>粘り強い</u> 深い愛情

仕方ないが、いつもこうだと子どもは自立できないだろう」のように、批判的な捉え方ができている（〈相違点〉の〔A 父親と母親の違い－〈父性〉と〈母性〉－〕）。

### 3－(2) 講義における「考察の展開」

講義の受講生たちに「比べ読み」課題に取り組みせ、先に挙げたような分析が受講生たちによって生み出された。それをもとに次のような考察をおこなった。

まず、表2のような「とびこめ」と「大きなしらかば」に共通する主題を提示した。

先に述べたように、基本的にはこのレベルでの主題に基づいて授業実践を展開することがあってもよいと認め、その上で先に示したような入選作品が指摘する観点から観るとどのような主題が浮かび上がってくるかについて吟味・検討していった。

### 3－(3) 入選作品を基に主題についての吟味・考察

入選作品が指摘した共通点・相違点に着目することによって、「とびこめ」について表3の傍線部のような特徴が浮かび上がってきた。「とびこめ」の主題をまとめると、次のようになる。

【子どもに対する父親の突き放すような厳しい瞬間的な深い愛情】  
一方、「大きなしらかば」の主題をまとめ直すと次のようになる。

【子どもに対する母親の包み込むようなやさしい粘り強い深い愛情】  
こうしてまとめると、この二つの物語はある程度の共通点は持っているが、表3の傍線部が示す点において異なった物語であるということができよう。同じ〈親の愛情〉でも、その質がかなり違うのである。

先に述べたように、単一の教材を扱うのであれば〈子どもに対する親の深い愛情〉というレベルの主題を扱えば十分であろう。一方、

教師は傍線部のようなことがらをも見通した幅広い主題をつかんで、この作品を扱うべきである。小学生であっても、下線部のようなことがらに気づく児童がいるに違いない。そうした学習者の意見を授業に生かすことができるように、指導者はより幅広い、豊かな教材研究をおこなう必要がある。その方法のひとつがこの「比べ読み」である。

## 4 同じような特徴・構造を持つ日本の物語

「とびこめ」、「大きなしらかば」はどちらも、ロシアの作家の作品である。訳者の西郷竹彦は、日本の文芸学者・児童文学研究者・ロシア文学翻訳家として知られている。また、国語教育界においては、文芸教育研究協議会（文芸研）を率いて活動し、多くの教師に影響を与えた。

これまで論じてきた特色を持つ「とびこめ」、「大きなしらかば」であるが、同様の特徴・構造を有する作品は日本にはないのであろうか。小出正吾（1949）の書いた「ぜっぺき」<sup>5)</sup>という作品が、子どもが高い所に登る話であるということを知ることができた。<sup>6)</sup>

### ■「ぜっぺき」のあらすじ

おじいさんが孫の正助からもらったふうりんを、もうひとつの臨海学校のおみやげである、いわひばのかぶからつりさげて楽しんでいる様子が描かれる。この一かぶのいわひばには、思い出してもひや水をあびせられるようなぼうけん談がついていた。

海の家での昼過ぎの自由時間のこと。昼寝をしていた北山先生が子どもたちにゆすり起こされる。海を家の裏山にぜっぺきがあり、正助がその岩のはだへかじりついていたのである。正助は動けず、じっとかじりついている。北山先生は「おうーい！」と呼びかけるが正助からの返事はない。「まっとれよう！そのまま動かずに、じっとつかまっとれよう！」と北山先生は言いながら、ボートのともづなをすばやくぐるぐるまきにしてに肩にかけ、岩山に向かう。

一方、正助は絶体絶命の危機にあった。両手と両足の指の先で、ぜっぺきにへばりついているのだが、岩がぼろぼろにくずれるので、どっちへも動くことができなくなっていた。正助はおじいさんのために、いわひばを取ろうとして、仲間2人と一緒にぜっぺきに登った。ところが岩山は潮風のためぼろぼろになっており、なかなかうまく登ることができない。仲間の2人はあきらめ、おりてしまった。正助だけがおじいさんのためだと登りつづける。正助はなんとかいわひばを手に入れ、夢のような気持ちになる。

ところが、いざ、おりて帰ろうというだんになって、足のやりどころにこまりはじめた。からだの重みをささえることのできるような足場は、どうしてもみつからない。そのうちに、手の指でつかまっている岩のひださえ、ぼろぼろくずれてきた。ここで手をはなしてしまえば、下にいっきに落ちてしまうだろう。とてもいのちは助かるまい。

そのとき、どこからか、人の声らしいひびきが聞こえてきた。「……動くでないぞ……そのままだな……じっと、しんぼうしておれよ……動くでないぞ。」まるでのんきな歌のような調子だった。それは北山先生が、正助をいきなりおどろかささないように、また急に安心させて手の力をぬかさないうにと、苦心しながら近づいてくる声だった。

北山先生はロッククライミングのようりで、正助のそばまでやってきた。「先生の号令どおりにするのだぞ……自分かってに、手をはなすなよ……。」先生はロープを正助のからだにまきつけ、「……さあ、もうだいじょうぶだ。……右手でロープをにぎれ……ようし！こんどは左手だ！」正助はびくびくしながら、岩をはなしてロープをにぎったが、北山先生が、がっちりひいているので、ふしぎに、からだはささえられていた。「……さあ、これで、足場をさがして、そろそろおりていくのだ！」正助は、ようやくおちついて、動き出すことができた。しばらくかかって、とうとう下まで降りつくと、友だちや先生たちが、どっとおしよせてきて、正助をだきあげた。

北山先生は、「ほくも、北アルプスでは、だいぶロッククライミングをやったものだが、まさか、

海の家でこんなぼうけんをしようとは思わなかったよ。」と言う。

おじいさんは正助からもらったいわひばを大事に育てている。けれども、おじいさんはかわいい孫のみやげのこのいわひばが、どんな所にはえていたか、それを取ってくるために、正助がどんなぼうけんをやったか、そんなことは、なんもごぞんじない。

この「ぜっぺき」においては、ぜっぺきにへばりついている男の子を助けるのは、男性の教師である。教師は「……動くでないぞ……そのままな……じっと、しんぼうしておれよ……動くでないぞ。」とのびりした声をかけることによって、子どもを助ける。

そして、次のように断崖を登っていき、子どものそばに行く。

北山先生はロッククライミングのようりょうで、正助のそばまでやってきた。「先生の号令どおりにするのだぞ……自分かってに、手をはなすなよ……。」先生はロープを正助のからだにまきつけ、「……さあ、もうだいじょうぶだ。……右手でロープをにぎれ……ようし！ こんどは左手だ！」

この教師の行為は子どものそばに寄り添うという意味において、「大きなしらかば」における母親の知恵と共通していると見ることができる。その一方で「号令」という言葉に着目すると、寄り添いながらも「命令」して従わせるという行為とみなすこともできよう。つまり、「とびこめ」の父親の「海へ、海へすぐとびこむんだ。うつぞ」「とびこめ。でないうつぞ。一、二。」を「号令（命令）」とみなすと、ここにも共通性を見出すことができるのではないだろうか。

教師という職業においては、あるときは〈母性〉的に子どもを包み込む存在となること、あるときには〈父性〉的に子どもに厳しく接する存在となること、この両方が求められるということである。

文学作品としては、「ぜっぺき」では「それは北山先生が、正助をいきなりおどろかさないように、また急に安心させて手の力をぬかさないようにと、苦心しながら近づいてくる声だった。」のように、先生の知恵を直接的に説明してしまっている。「とびこめ」と「大きなしらかば」では、父親の機転、母親の知恵については直接的には何も説明されない。できごとだけが描写されるが、読み手はその奥にある機転や知恵、そして親の愛情を読み取る。この意味で文学作品としての深さは「とびこめ」と「大きなしらかば」の方に軍配が上がるであろう。

また、「ぜっぺき」においては、「ぼくも、北アルプスでは、だいたいロッククライミングをやったものだが、まさか、海の家でこんなぼうけんをしようとは思わなかったよ。」と教師が断崖を登ることができた理由が明らかにされるが、やや飛躍があると言わざるを得ない。

「ぜっぺき」での子どもを高所からおろす方法は、どちらかと言えば「大きなしらかば」に近いと言えよう。そうではあるが、「おおきなしらかば」においては、「べっそうの人」という〈第三者〉（傍観者）が余計な口をはさみ、それが緊張感を高める働きをしている。それに対して「ぜっぺき」はそうした役割を担う人物は出てこない。ここでも、物語の作りとして物足りなさを感じさせる。

この考察は、「とびこめ」と「大きなしらかば」、そして「ぜっぺき」という三つの作品の「比べ読み」

をおこなった成果であると言えよう。

## 5 まとめ―「国語科教材研究の基礎としての比べ読み」の成果と課題―

### 5－（１）「国語科教材研究の基礎としての比べ読み」の成果

#### 5－（１）－１「比べ読み」の有効性の確認

本論の【1－（２）「比べ読み」に関する先行研究―】において、坂東・貞安（2022）の論を取り上げ、「比べ読み」の有効性について次のように述べた部分を引用した。

「比べ読み」の有効性の一つとして、複数教材を観点を定めて読むことで、学習者が自分の読みの過程や評価を捉え直すことができ、それが次段階の自分の考えを形成する際の基礎的作業となることを見出せる。

本論では、「国語科教材研究の基礎としての比べ読み」に焦点を当てているため、上の「学習者」が「指導者（教師）」に置き換わる。この引用の中で「基礎的作業」と指摘されているように、まさに「国語科教材研究の基礎としての比べ読み」ということになる。

本論において展開した「比べ読み」を通して、こうした「基礎的作業」をおこなうことにより、教師としての教材研究の幅が広がっていくこと、つまり「比べ読み」の有効性を確認することができた。

#### 5－（１）－２「比べ読み」の要件の満足

先行論文として示した大西（2023）においては、「比べ読み」の要件として次の３つが提示されていた。

- ① 作品の特質を明らかにする
- ② 読みの問題を設定し、問題解決を図る
- ③ 他者との交流を通して、新たに発見したことを表現する

「① 作品の特質を明らかにする」については、本論において「とびこめ」と「おおきなかぶ」について「比べ読み」によって、それぞれの作品の特質を浮かび上がらせた。

「② 読みの問題を設定し、問題解決を図る」については、〈子どもに対する親の深い愛情〉という主題の捉え方でよいかという問題を設定して、その問題解決を図った。「比べ読み」をおこなうことによって、「とびこめ」の主題は、【子どもに対する父親の突き放すような厳しい瞬間的な深い愛情】と捉えることができ、「大きなしらかば」の主題は、【子どもに対する母親の包み込むようなやさしい粘り強い深い愛情】とまとめることができることを論じた。

「③ 他者との交流を通して、新たに発見したことを表現する」については、受講生が書いた分析には多様な意見があり、それをもとに交流をおこなった。この交流により、受講生たちは新たな発見に至ったであろう。

このように、「比べ読み」の要件を満足する講義であったことを確認できた。

## 5－(2)「国語科教材研究の基礎としての比べ読み」の課題

### 5－(2)－1 小学校の授業において展開する可能性の追求

本論において扱った「とびこめ」と「大きなしらかば」の「比べ読み」を、小学校の授業において展開することは可能ではあろう。ただし、一つの教材の読解だけで精一杯でありとても他の教材と比較する余裕などないという教師も多いであろう。本論ではあくまで教材研究の「基礎的な作業」として扱った。本論の冒頭において述べたように、学習指導要領は「多読」を求めている。「精読」を軽視することなく、「多読」の実践もここぞというときにおこなうべきであろう。ここをどのように乗り越えていくかが、これからの教師に求められている大きな課題のひとつである。

### 5－(2)－2 「比べ読み」のための作品を見つける方法の開発

平成23年版度教科書から、国語科教科書教材の手引きの最後に「このほん、よもう」（光村図書）「こんなほんもよんでみよう」（東京書籍）などのように、主教材の作者の作品群やテーマの似た作品群の作品名と表紙が載せられるようになった。つまり、教科書においても、「比べ読み」の対象となる作品紹介がおこなわれている。一つの作品の内に向かって読んでいく「閉じた読むこと」の学習指導から、その作品から他の作品へと「開いていく読むこと」の学習指導への転換が求められているのである。

インターネット上にも、「比べ読み」の対象となる作品を見つけるヒントが数多く存在する。今後はAIの発達によって、「比べ読み」の対象となる作品を見つけることがさらに容易になっていくであろう。ただし、最後にものを言うのは、あくまで教師の「目利き」である。その「目を鍛える」ためにも、本論において示した「基礎的な作業」としての「比べ読み」のような事例を積み重ねる必要がある。

以上、まとめとして、「比べ読み」による教材研究に関する成果と課題について指摘した。

## 〈注〉

- 「国語科教材研究の基礎としての比べ読み－「おおきなかぶ」（1年）と「スイミー」（2年）を中心に－」神戸女子大学『教育諸学研究』第35巻、2022、51-63  
○「比べ読みによる小学校国語科教材の教材研究の試み－「海の命」と「一人の海」の比べ読みにより〈空所〉を埋める（Ⅰ）－」『神戸女子大学文学部紀要』56巻、2023、155-170  
○「比べ読みによる小学校国語科教材の教材研究の試み－「海の命」と「一人の海」の比べ読みにより〈空所〉を埋める（Ⅱ）－」神戸女子大学『教育諸学研究』第36巻、2023、65-79
- フェミニズムの立場から見ると、〈父性〉と〈母性〉という捉え方に問題があることは承知しているが、ここでは比較のため、あえてこの用語を使う。なお、この二つの教材が教科書教材として採られなくなった理由のひとつとして、〈父性〉と〈母性〉の典型を描いていることが、時代に合わなくなったことを挙げることができよう。
- 兵庫教育大学大学院での講義「読解読書論」（隔年開講）。2003年度と2005年度の受講生による「比べ読み」の成果より。

- 4) 池田（1986）は、次のように述べている。「同化・異化」概念は、西郷竹彦氏の文芸理論において、視点論と読解指導論とを関係づける鍵概念として構想されている。
- 5) 小出（1949）。なお、YouTube に次の映像が載せられている。「まんがこども文庫 20-1 『ぜっぺき』 1979年2月16日放送」。https://www.youtube.com/watch?v=RZqz0zPcutA (2023年10月31日確認)
- 6) 本論において先行論文として引用した大西（2023）の執筆者である大西光恵氏（立命館大学授業担当講師）が情報を寄せてくださった。記して感謝したい。なお、大西氏は、兵庫教育大学大学院での講義「読解読書論」の受講生のひとりでもある。

#### 〈引用・参考文献〉

- 池田久美子（1986）「同化・異化」概念の混乱－読者論の必要性－『信州豊南女子短期大学紀要』第3巻、315-334
- 大西光恵（2023）「クリティカル・リーディングを深める国語科学習指導－文学作品の「比べ読み」を通して－」『立命館教職教育研究』10号、11-20
- 川村正和（2014）「読みの力を高める比べ読みの指導の工夫」『教育実践研究』第24集、55-60
- 小出正吾（1949）「ぜっぺき」初出誌は『ひかりのくに三年』1949年9月 昭和出版。本論では『小出正吾児童文学全集』2 2000 審美社 249-260 によった。
- 佐藤綾花（2018）「文学教材における比べ読みの可能性」『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』第2巻第1号、65-81
- 田中宏幸・小野奈央（2011）「現代評論文の学習を通して思考力・記述力を高める高等学校国語科授業の研究：山崎正和の評論「水の東西」を用いた「比べ読み」「重ね読み」の実践」『広島大学大学院教学研究科紀要』第二部、文化教育開発関連領域 60号、59-66
- 坂東智子・貞安菜央（2022）「言語行為主体性を育成する「比べ読み」指導に関する研究－「君は『最後の晩餐』を知っているか」「『最後の晩餐』の新しさ」（光村中2）－」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第54号、209-218